研究プロジェクト

研究プロジェクト一覧（平成 24 年度）

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
負の感情	負の感情研究－怨霊から嫉妬まで	鎌田東二
	ストレス予防研究と教育	カール・ベッカー
	快感情の神経基盤	船橋新太郎
	甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	河合俊雄
こころ観	こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか?）	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究	鎌田東二
	メタ認知に関する行動学的および神経科学的研究	船橋新太郎
	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
きずな形成	信頼・愛着の形成とその成熟過程の比較認知研究	森崎礼子
	他者理解に関わる感情・認知機能	吉川左紀子
	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
	コミュニケーションの言語・文化的基盤	内田由紀子
	治療者・社会・病に関する意識調査	カール・ベッカー
現代の生き方	新人看護師のストレス予防とSOC改善調査	カール・ベッカー
	文化と幸福感：社会的適応からのアプローチ	内田由紀子
自然とからだ	癒し空間の比較研究	鎌田東二
発達障害	発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ	河合俊雄
	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
教育	こころ学創生：教育プロジェクト	吉川左紀子
WISH 事業	脳機能イメージングと心理学実験設備の整備と運用体制の構築	阿部修士
震災	東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～	鎌田東二・内田由紀子
ブータン	ブータン仏教研究プロジェクト（BBRP：Bhutanese Buddhism Research Project）	鎌田東二

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
察するコミュニケーションと表すコミュニケーション	宮本百合（ウィスコンシン大学マディソン校助教）
1型糖尿病患者の療養に影響する心理的要因の検討	藤本新平（高知大学医学部教授）
被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究	大西宏志（京都造形芸術大学教授）
他者を察するこころ、他者から学ぶこころの形成過程：表情認知課題を用いた文化心理学的研究	増田貴彦（アルバータ大学心理学部准教授）

研究プロジェクト

負の感情研究――怨霊から嫉妬まで

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■負の感情

人間の「こころ」のはたらきの中で特に大きな影響を及ぼすのが「負」の感情である。「負」の感情には、たとえば、怒り、憎しみ、恨み、嫉みなどさまざまあるが、その「負」の感情をコントロールすることは容易ではなく、「攻撃」に代表される社会的行動の最も強力な「動機」となり得るとされてきた。本研究では、これまで「負」とされてきた感情を、「正」の感情との相補的な関係や、「正」の感情との可換性を手がかりに、同時代の諸社会における参与観察とさまざまな時代の文献解釈を往還しつつ分析してゆく。

平成24年度は、『古事記』を中心的な題材として、そこで取り上げられる「負の感情」の諸相について、宗教学的な視点、および心理学的な視点から検討した。また、祇園祭を「負の感情」を鎮める装置と見なし、その原理を考察した。

■『古事記』における負の感情の発生と鎮め方「吾に辱見せつ」

伊邪那美命の辱（はじ）は、「見るな」のタブーを破って自分の姿を見た夫イザナギに対する激烈な怒りと悲しみに起因する。その怒りと悲しみは「はぢ（辱）」の感情とともに現れ出た。石長比売（イワナガヒメ）の場面の「恥ぢ」は、父神の大山津身神が婿神となるニニギノミコトの無理解と娘の醜形を思い知らされたことによる「恥ぢ」であり、それを娘の石長比売も共有する。豊玉毘売命（トヨタマビメ）は、本国の姿である「八尋鮫（やひろわに）」の姿となって出産したが、その姿を見られて、2人はもう二度と会うことができないことになった。そのことを「恥」とした。

『古事記』に引用される「はじ」の感情の特徴は以下のように結論づけられる。つまり、「はじ」とは、「神々」の「身体」のある種の異様さに伴って強烈に生起する、「神々」の「感情」を激発させる源泉となっている。同時にそれは、2つの世界の交わることのない断絶を生み出す強力な装置である。

また、スサノオ、ホムチワケという『古事記』の登場人物を比較し、神話における「負の感情」との対峙および人格形成について分析した。それぞれに同型の逸話が見られるが、彼らの人格形成の過程は異なっている。スサノオは、姫に詞を贈るなど、「達成したこと」によって、ホムチワケは、姫から逃亡するなど、「否定を反復すること」によって、それぞれ「負の感情」と対峙し、人格を形成しているという、神話における「こころ」の変容における2つの原型が提示できた。

■負の感情から読み解く祇園祭

祇園祭の始まりは貞観5年（863）、勅命によって、神泉苑で始まった御霊会が起源である。その後、貞観11年（869）に疫病が流行したので、卜部日良麿が66本の矛を立てて諸国の悪霊をそれに憑けて祓いやる御霊会を行い、その際、牛頭天王を祀って、神泉苑に送った。それはまた、貞観大地震の12日後であった。貞観大地震は、旧暦の5月26日、すなわち、太陽暦の7月9日の20時頃に起こったという。陸奥の国で大地震が起きたのである。被災地は阿鼻叫喚に包まれ、人々は立つことすらできず、家屋の下敷きとなり、地割れにのみこまれた（『日本三代実録』901年編纂）。保元2年（1157）、その御霊会（祇園祭）の祭礼の威儀を増すため、洛中の富家に馬上役をあてて、神事の費用を負担させた。末代までも太平にと、後白河天皇が直々にことを進めた。その前年の保元元年（1156）、「乱世」の始まりを告げる保元の乱が起こり、天皇家、藤原摂関家、平氏、源氏が、親子兄弟が敵味方に分かれて、争い、殺し合った事態への「鎮め」のためであった。嘉禄元年（1225）、祇園社に長刀が寄進されるが、これが長刀鉾の起源とされる。

ところで、祇園祭には能管が使われている。南北朝時代頃に、曲舞から楽が取られ、はじめは能管・鉦・太鼓・大鼓（おおつづみ）の4楽器であり、後に大鼓が消えていったという。祇園囃子が鉦と能管を重視していることからも、鎮魂儀礼的な位置づけができることが裏付けられよう。

スサノオ		ホムチワケ
泣き虫	傾向	緘黙
母イザナミ	負の感情の出所	母サホビメ
呪詛・死	母のあり方	守り・見捨てる
黄泉の国	異界	出雲の神
外向き	攻撃性	内向き
八重垣姫に詩を贈る	姫との出会い	ヒナガヒメ逃亡

研究プロジェクト

こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■「こころ観」の多様性と共通原理

人類はこれまでにさまざまな仕方で「こころ」を捉えてきた。西洋近代の哲学においては「思惟」を始めとする知的働きの出発点であり、鎌倉仏教においては「身」と密接に繋がり合った働きであり、科学においては脳・身体による複合的な働きである。多彩に措定される「こころ」を、本研究ではあえて「こころ観」として捉え直し、宗教、哲学、および科学における「こころ観」を比較させることによって、その「こころ観」の多様性と共通原理に迫ってゆく。平成24年度は、（１）宗教における身心変容技法の実践を比較検討し、（２）フォーラムを開催して「こころ」の表現に実践的に関わった。

■研究会の概要

研究会では、仏教、イスラム、シャーマニズム、修験道をテーマとした。蓑輪顕量（東京大学／仏教学）教授には「仏教における瞑想とその展開」のテーマのもと、アジアの仏教における瞑想の広がりについての報告を受けた。東南アジア上座仏教における２つの瞑想の系統samathayanika（「止行者」：四禅の境地を体験してから観に移る）、およびvipassanayanika（「観行者」：四禅の境地を体験せずに観に移る）の紹介、中国における仏教的瞑想の受容と展開の概説をふまえ、日本の中世における瞑想の受容（良遍、道元を中心とする）に関する知見を深めた。

鎌田繁（東京大学／宗教学、イスラム神秘主義研究）教授には、「スーフィズムにおける身心変容技法について」の題のもと、イスラームにおける身心変容技法「スーフィー」の２つの諸相（ズィクル dhikr：文句の繰り返し、サマーウ samāʿ：歌・踊り）に関する意義と可能性を明らかにした。

アルタンジョラー（千葉大学大学院）研究員からは「モンゴルのシャーマニズム」、奥井遼研究員からは「羽黒修験」に関する報告を受けた。モンゴルのシャーマン「ブォ」の技法と通過儀礼（「悪魔祓い」「動物供犠」「憑依儀礼」「難関越え」など）に関する報告と議論を行った。各種儀礼（火を食する、生の血を飲む、磁器を噛み砕く）を体験するなかで、ブォは技法を身につけ変容する。羽黒修験道における修行のシステムを、苦行と教理という２つの軸と、それを動かす行者の共同体の働きとして読み解いた。具体的には、音楽的動行と肉体的苦役によって得られる身体的（コーポリアル：corporeal）な意味と、教義によって与えられる理論的（コスモロジカル：cosmological）な「意味」とが混ざり合って、「悟り」に近づいていくことを明らかにした。

「地元文化自慢授業」

■フォーラム

研究会の成果報告として、２度のフォーラムを行った。沖縄久高島および京都の和知および西賀茂から中学生を招いて開催した「地元文化自慢授業」（京都府と共催）、および、「観阿弥生誕680年・世阿弥生誕650年記念――観阿弥と世阿弥の冒険」である。「地元文化授業」では、久高中学校の教員による琉球古典舞踊「かせかけ」、中学生による「あぶじゃーまー」、琉球空手の実演、太鼓を用いたダイナミックな「エイサー」が実演された。実演の締めくくりは、会場の参加者を巻き込んでの「カチャーシー」であった。次いで、西賀茂中学校の生徒による、「神楽」の舞および福島県いわき市立小名浜中学との交流活動の紹介、和知中学校の生徒による和太鼓の実演、および和知人形浄瑠璃のビデオ紹介が行われた。

「観阿弥と世阿弥の冒険」では、観阿弥、世阿弥の流れを汲むシテ方五流の最大流派である観世流の二十六世観世宗家・観世清和師、能を中心とする日本の中世芸能・中世文学の研究者として活躍する東京大学大学院教授の松岡心平氏を迎え、能の発生と起源伝承、観阿弥・世阿弥が生き抜いた時代、能の表現と創造性について、舞囃子の実演をまじえたダイナミックな内容で繰り広げられた。観世清和宗家による講演の後、舞囃子「敦盛」の実演があり、松岡心平教授の講演および対談を行った。

「観阿弥と世阿弥の冒険」

研究プロジェクト

こころとモノをつなぐワザの研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）＋ 奥井　遼（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定研究員）

■ワザ学

「ワザ（技・業・術）」とは、物の世界に形を与え、人間世界に広がりと深みをもたらすことを可能にする、こころと物との媒介通路を意味する。人間はこれまでに、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かなワザを創造、継承、改変してきた。このようなワザに着目し、人間のこころと、物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味し、「物は豊かだがこころは貧しい」と言われる今日において、物とこころとの奇妙な二元的乖離を脱し、個性と自由を担保した生の豊かさを切り拓く道を模索する。平成24年度は、世阿弥研究会、柳宗悦研究会、フィールド調査、一般公開シンポジウムを行った。

■世阿弥研究会

観世流能楽師河村博重氏を交え、毎月２回、世阿弥の書き残した「伝書」を読解することによって、言葉によってワザを記した世阿弥の思想および文体を読み解くことを目標としている。世阿弥中期の思想は、一座を率いる興行主として、また一流の舞い手として、謡と舞の「二曲」、基本の舞である「三体」の、いずれに対しても具体的で生き生きとした指南が取り上げられている。世阿弥の知恵は、能という１つの活動の枠を越えて、今日におけるワザの活動全般に、またワザにかかわる思想の追求にとって参照点と捉えられる。

世阿弥研究会開催記録

開催月	テキスト	キーワード
4月	拾玉得花	序破急、我意分、却来、閑心遠目、体心捨力
5-6月	音曲声出口伝	一調・二機・三声、調子と拍子、同心一曲の感
7月	人形	二曲、三体、序破急に五段、力動風
8-11月	曲附次第	重聞、無曲感聞、有文音感
12月	風曲集	横・竪、有文・無文
1-2月	遊楽習道風見	器用、器物、二曲、舞歌、時分の花
3月	五位	妙風、感風、意風、見風、声風

■フィールド調査

具体的なワザの働きを分析することを目的として、京都の祇園祭、沖縄の久高島、および淡路島での調査を行った。祇園祭では、山鉾連合会会長にインタビューを行ったが、会長の自宅は、祭の喧噪そのままに、たくさんの町衆が行き交う活気ある場となっていた。久高島では、旧正月の儀式の一部始終を観察し、厳粛な儀礼に立ち会うことができた。特に、儀式の最中にも島人たちは芸能（カチャーシー）にも興じ、厳粛さと華やかさとが一体となった、芸能の原点とも言いうるような生きた舞を見ることができた。厳粛な雰囲気と華やかさを矛盾なく接続させた三線の演奏は、その場を支えているまさにワザであった。

淡路島での調査においては、2012年11月と2013年１月、公演事業にむけた重要な稽古場面に立ち会うことができ、学びを成立させている身体的やりとりを明らかにするための豊富なデータを得た。淡路人形座において、人形遣いたちは知恵を出し合いながら人形の振り付けを完成させていくが、その過程は、彼らの活動の２つの軸である「淡路人形の伝統」と「現代にも通じるスペクタクル」に貫かれた、緊張感を伴いながらもユーモアと工夫に満ちた、実に生き生きとした学びの場である。彼らの相互身体的なやりとりにおいて達成される「学び」モデルを構築することは、今日の学校教育における教師と生徒の関係のあるべき姿を導くきっかけとなるだけではなく、個人から個人へと知識を伝達するモデルで捉えられてきた近代教育の根本原理を問い直す可能性を有している。加えて、淡路人形座という共同体の中で遂行される稽古場面からは、共同体の歴史・物語に関する生きた知識を学ぶ姿勢、１つの活動を継承させていくことの難しさと面白さを受け取ることができる。今後も淡路人形座への集中的なフィールド調査を行うことによって、「身体による学び」、「こころ豊か」な学びのあり方を模索していきたい。

■シンポジウム

「ワザとこころ　パートII～祇園祭から読み解く」と題したシンポジウムを行い、祇園祭を主題とした映画上映、講演、ディスカッションを行った。平成23年度の「ワザとこころ～葵祭から読み解く」に続いて、京都を代表する祭り「祇園祭」に込められた「ワザとこころ」を探る。研究者、表現者、祭りの担い手が、それぞれの持ち場と観点からテーマに即して問題提起や報告をし、ディスカッションを行った。

関連論文

鎌田東二「民俗芸能・芸術・聖地文化と再生」（稲場圭信・黒崎浩行編『震災復興と宗教』第12章、明石書店、2013年３月刊）

奥井遼「身ぶりと言葉による『学び』――人形遣いのわざ習得場面における行為空間の記述」『ホリスティック教育研究』第16号、2013年２月刊

研究プロジェクト

他者理解に関わる感情・認知機能：2 者の「関係」を判断する

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）＋ 上田祥行（こころの未来研究センター特定助教）

■印象判断と2 者の「関係」の判断

顔に含まれているさまざまな情報から、人はその人物の人となりを推測する。100ミリ秒程度の短い時間でも、人は目の前の人が信頼できるかどうか、自分より優位に見えるかどうかといった社会的判断を行うことができる。こうした判断をするとき、顔の表情は重要な手掛かりになる。たとえば、怒りの表情は「支配性の強さ」、微笑んでいる表情は「親しみやすさ」の印象と結びつくことが知られている。

本プロジェクトでは、昨年度から今年度にかけて、複数の他者の間の「関係」を判断するときにも、個々の他者に対する印象判断のプロセスが基盤となっているか否かを調べる実験をさまざまな条件のもとで実施してきた。

たとえば、2者が向かい合っている場面で、両者が笑顔である場合、2者の間に友好的な関係があると推測される。では、一方が笑顔で一方が真顔の場合はどうだろうか。2者の間には、「笑顔の人物が真顔の人物をなだめようとしている」「真顔の人物が笑顔の人に抗議をしている」などさまざまな状況が想定できる。さらに、どちらがその場面で支配的な位置にいるかも、2 人の人物の表情を観察することで推測することができる。こうした「関係」を素早く理解できるかどうかは、その場面で適切にふるまううえで重要な認知的能力である。

対人認知研究の領域において、個々人の対人印象を推測するプロセスに関してはこれまで多数の研究が実施されてきたが、複数の人の「関係」を推測するプロセスに関する研究はほとんど行われていない。本研究では、さまざまな表情で対面する 2 名の人物のうち、どちらが「支配的」と見えるか（その場を支配しているように見えるか）を2択で判断する「関係」の推測に関わる課題を用いて、まず、「2者の関係の判断は、個々の人物の印象判断の結果の比較によってなされる」という作業仮説を検討した。

■評定課題と2 択判断

実験では、8名の女性が怒り、喜び、悲しみ、恐れ、嫌悪、驚き、中性（真顔）の7種の表情を表している表情写真を用意し、まずひとりひとりの「支配性（dominance)」の印象を 9 段階で評価する課題を行った（図 1 A)。続いて、さまざまな表情で向き合う2名のうち、どちらがより支配的に見えるか、その場を支配しているように見えるかを判断する2択課題を、7種の表情写真のすべての組み合わせを用いて行った（図 1 B)。

■実験結果から分かったこと

個々の人物のさまざまな表情写真に対する「支配性」の印象評価を表情別に比較してみると、評定値の高いほうから低いほうへ、怒り、嫌悪、恐れ、中性（真顔)、驚き、悲しみ、喜びの順となった。怒りや嫌悪の表情を浮かべた人物がもっとも支配性の印象が強く、喜びの表情はもっとも支配性の印象が弱い。ところが、2者が向き合う場面で「どちらが支配的に見えるか」という 2 択判断を行うと、喜び表情が他のどの表情と組み合わせた場合でも「より支配的」と判断され、続いて、中性、怒り、嫌悪、恐れ、驚き、悲しみの順で支配的と判断される割合が低下した。

1 人の人物の表情に対する判断と、2者が向き合う場面での「関係」を問う判断で、喜び表情に対する評価が「もっとも支配的でない」から「もっとも支配的」と180度変化したことは大変興味深い。これは、複数の人物の間の「関係」に関する判断が、個別の人物に対する印象の比較に基づいて行われているのではないことを端的に示す結果である。人物間の関係についての判断の背後にある心的プロセスについて、さらに検討する計画である。

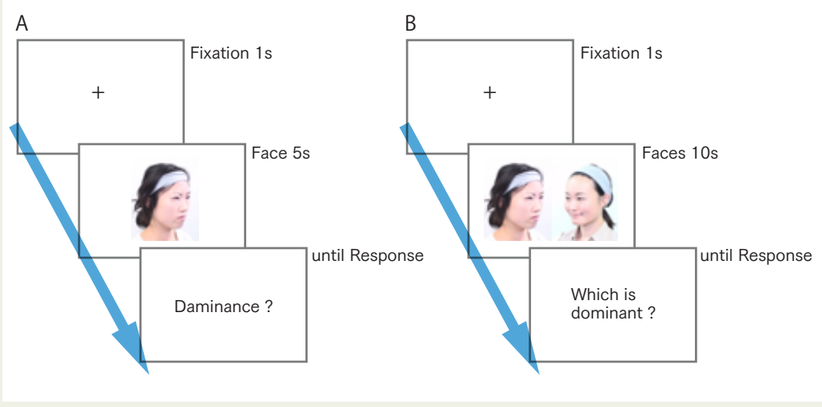


図 1　実験の流れ。A は支配性の評価課題、B はどちらが支配的に見えるかの比較課題

研究プロジェクト

コミュニケーションの言語・文化的基盤

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

本研究は、科学研究費補助金基盤研究B（研究代表者：名古屋大学唐沢穣教授）の分担研究として実施しているものであり、コミュニケーションにおける言語の持つ影響ならびに文化的習慣や価値観がもたらす影響の双方を検証し、文化心理学と言語学の共同的知見の確立を狙うことを目的にしている。特に、本研究では心理学と言語学の双方から、日本における援助にまつわる言語表現と、援助者、援助の受け手、そして状況の関係性認知との関連を検討する。

なお本研究の共同研究者は岐阜大学留学生センター吉成祐子氏、こころの未来研究センター研究員（平成24年当時、現在は名古屋大学大学院）の京野千穂氏である。

■研究の背景

これまでの文化心理学的知見により、北米文化では個人をベースにした契約的対人関係が優勢である一方、日本文化においては共有された社会関係の場の中に個が包括されていると指摘されている(Kitayama & Markus, 2000)。援助場面においては、北米では互いの行動に際しての相手の意図の確認が重視されるのに対し、日本では状況要因に着目し、相手の意図を自発的に読み取って行動することが必要とされる(Kim et al., 2006; 内田・北山 , 2001)。実際Uchidaら(2008)による日米比較では、援助者による援助時の記憶に基づく表現は日本ではアメリカよりも受け手の状況について精緻化されて多くの記述がみられることが示されている。

このような文化差は、言語表現の違いにも対応している。吉成(2007)によると、援助者の表現において、英語話者では “Do you want to use this pen?” のように相手の意図や願望を確認する表現の出現頻度が高いが、日本語では特に目上に対してこのような表現を用いることはタブー視され、実際に出現頻度も低く、かわりに「ペン貸しましょうか」という申し出の表現や「ペン使いますか」のような援助者の行為（ペンの貸与）を前提とした行為質問の表現の使用がみられる。これらの知見を総合すると、日本語話者は受け手の状況への注意が優勢であり、援助にまつわる会話には意図や願望の確認よりも、互いが置かれた状況の説明が行われ、それに基づき援助者は自らが何をするべきか察して援助を行うと考えられる。

■調査の方法

１）援助のやりとり時の発話と認知に関する心理・言語学的検証

「サポート提供時の認知研究」と「申し出表現の研究」をもとに、「援助のやりとりに関する意図確認：確認的発言が及ぼす影響」の研究を実施した。特に援助のやりとりにおける言語表現において、受け手の意図確認の有無という点で文化的な差が見られると思われる日本語母語話者・英語母語話者の言語行動を検証の対象とした（平成24年度は日本語母語話者で調査を実施)。調査参加者には援助をした場面（もしくはされた場面）について記憶再生の自由記述、その際の認知・感情の評定をもとめた。具体的には援助場面の描写と援助者・被援助者の状況、そしてそこでなされた会話を記述してもらい、その後、援助行為の最終決定がどこでなされたか、援助のやりとり後の関係性や感情、関係の親しさなどを評定してもらった。これにより、言語表現が関係性の認知に与える影響を検証することが可能になる。

２）表現そのものについての言語学的検証

援助にまつわる会話表現を上記調査において収集し、日本語における援助表現の特徴を検討した。上記 2 つの知見をあわせて、日本語の表現と関係性の認知との関連を検証した。特に「テモラウ」「テクレル」表現とそれにまつわる認知について分析を進めた。

■示唆された結果

会話表現においては、援助要求表現は全状況の27.5%でみられたが、願望意図の明示は10.9%程度であった。一方、援助提供表現は援助者行為表現が19.6%で見られたが、願望意図の確認は2.9%に留まった。互いの状況説明は52.9%の状況で見られ、援助の授受の了承についての表現も38.4%、感謝が50%見られた。これらの結果から、日本においては互いの状況説明→場合によっては援助要求表現（もしくは援助提供表現→了承and/or感謝）という会話の流れが多いことが明らかにされた。

関係性の認知との関わりをみたところ、受け手にとっては相手からの援助提供表現があったときにネガティブ感情が減じられるが、援助者は援助表現をしたときに相手がよりネガティブに感じてしまうのではと危惧しているという交互作用が見られた。日本語話者の慣用的表現と関係性の認知との関わりを今後より詳細に検討する必要があるだろう。

■対外活動ならびに成果の発表

これまでの調査結果は、平成24年11月に行われた日本社会心理学会にて発表され、現在は論文執筆を行っている。

内田由紀子・吉成祐子・京野千穂(2012)「援助行動における言語表現と関係性の認知：日本文化における検証」日本社会心理学会第53回大会 2012.11.17 筑波大学。

研究プロジェクト

文化と幸福感：社会的適応からのアプローチ

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

日本文化は関係志向的、もしくは相互協調的であり、人々が「関係性」を重視していることが示されてきている。しかしその一方で、近年の日本においては、「ひきこもり」など、不適応感や対人関係の難しさとコミュニケーションの不全が取り上げられることも多くなってきている。

本研究では若者の幸福感と不幸せ感を検討し、心の健康と文化・社会的適応に関連する諸分野への貢献を目指す。さらに、日本文化の中で中心的に見られる現象だけではなく、個人主義的な行動様式を誘発するような組織・制度についても調査研究を行うことで、人々の心の変化と適応の方法を検証する。

従来の社会心理学・文化心理学は、集団内の「中心的傾向」を対象とし、文化内の分散はあまり考慮に入れられなかった。それゆえに、個々の文化の中で生じる適応・不適応がどのような形で表れるのか、またそのような文化の中心にはいない人たちの心理傾向については明らかにされていない。適応感や不適応感を導く文化内の分散・個人差を考慮に入れた実証データの提示を試みることにより、より多層的な幸福感の有り様を明らかにする。さらに平成22年度までのプロジェクト「青年期の社会的適応：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討」を継承し、実際に社会で起こっているさまざまな心の問題へのアプローチを視野に入れる。

本研究は、１）学生を対象に、コミュニケーション、自己価値の置き方、感情表出等を検証し、これらと幸福感・不幸せ感の関連を調べる、２）企業に勤める一般社会人を対象に、幸福感や遺伝子発現に表れる炎症反応などを調査し、「個人主義的価値観」が心身に与える影響を精査する、３）ニートやひきこもりに関連する社会・文化的構造について、文化心理学による日米比較研究を通じて検討を行う、という３点を検討することを目的としていた。

■平成24年度の研究内容とその成果

１）企業でのデータ収集と、大規模調査への準備

一橋大学の阿久津聡教授を中心に、日本において「個人主義」的な制度を取り入れてきた企業や外資系企業などにおける状況サンプリング調査を実施、企業内で感じられている「独立」「協調」それぞれの課題の内容とそこで感じられる感情経験について具体的に検討を行った。これらの研究を足がかりに、北山忍（ミシガン大学教授・こころの未来研究センター特任教授）やUCLAのSteve Cole教授とのディスカッションをもとに、今後は企業の検診と連動させ、生理学的知見、遺伝子多型の解析、さらには遺伝子発現のデータとあわせて、企業内の個人主義的制度が従業員の健康にもたらす影響について検証する大規模かつ包括的なプロジェクトを実施することができた（このプロジェクトは平成25年からの基盤研究Bとして採択された）。

２）ニート・ひきこもりと動機付けについての考察を深め、書籍『「ひきこもり」考』（河合俊雄・内田由紀子編、創元社）を出版した。さらに、ニート・ひきこもりリスクの高い人における表情認知課題としても実験を進め、研究発表を行った。

３）幸福感について心理学のみならず経済学や社会学の関係者とのディスカッションを重ね、「持続可能性と幸福度」研究会を立ち上げた。研究代表者は内閣府の幸福度に関する研究会委員としても活動し（2010－2013年）、現在日本の幸福の指標のあり方ならびに東日本大震災が幸福感と対人関係に及ぼした影響について検証し、論文での成果報告を行った。

■今後の検討課題

日本における社会構造の変遷と人の心の変化、幸福のよりどころについてより詳細に検討を行うため、実際に成果主義を導入してきたような企業におけるデータ収集を行い、心身の健康と幸福、そして個人主義的価値観との関連を調べていく方針である。

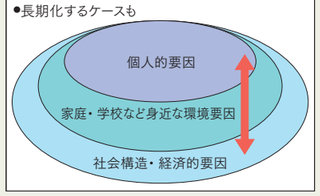
河合俊雄・内田由紀子編『「ひきこもり」考』（創元社）

社会の変化

- 雇用システムの変化：社会の流動性の高まり
- アメリカ的「個人主義」の価値観の導入
- 流動性と競争社会の個人主義化で「努力すればかなう」という神話や「学校から会社への場つなぎ」が崩れる
- 日本人の人間関係のベースは「場」や「役割」→それが失われると、居場所がなくなる

ニート・ひきこもり

- 日本におけるひきこもり：推定70万人（内閣府、2010）
- 10代後半～40代まで
- 長期化するケースも



研究プロジェクト

癒し空間の比較研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

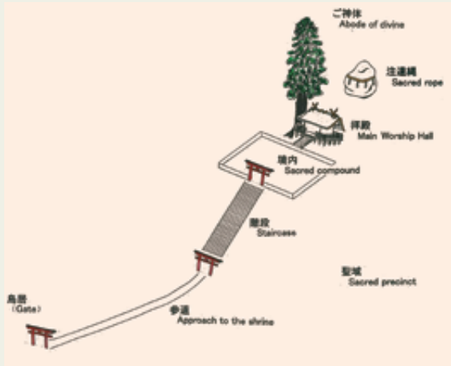
■癒し空間の特色

日本における政治・宗教・文化・観光の中心を成してきた平安京・京都に形成されてきた寺社や聖地などの「癒し空間」を、宗教学・資源学・生態学・民俗学・芸術学・衣食住文化研究・認知科学・認知心理学・臨床心理学などの方法を用いながら、総合的・多角的に研究を進め、世界各地の癒し空間との比較研究を試み、人に安らぎや崇高さを感じさせる場の特色とその心的メカニズムを突き止める。

癒し空間の比較研究は、資源・循環・多様性・地球地域学・文明環境史の観点から見てもきわめて興味深い事例であり、そこから抽出された特性は現代の心の平安を再検討していく際に多大の示唆と手がかりを与えてくれるだろう。人類文明の“安心”“安全”“安定”という「平安」の条件や機能を再検証し、再活用する可能性を示唆できる。

■神社の類型と防災拠点

神社の多くは、水のある環境に建てられている。ここでは、それらを「川中島」、「海中島」、「湖中島」、「池中島」の四つの類型を用いてその特徴を捉えた。たとえば、京都の下鴨神社、上賀茂神社などは「川中島」、安芸の宮島の厳島神社、江ノ島神社、大三島神社（地先の島、全国の弁天島）は「海中島」、琵琶湖の竹生島・多景島などは「湖中島」、木島神社などは「池中島」である。「川中島」を詳しく見てみると、下鴨神社の場合、糺の森と河合神社と本殿が、東の高野川と西の賀茂川に囲まれ、さらに、東の瀬見の小川と西の泉川に囲まれていることが分かる（二重の川中＝水垣）。上賀茂神社本殿は、西の賀茂川の畔に、東の御物忌川と西の御手洗川に囲まれている。天河大辨財天社は、孔の開いた巨大な磐座の上に鎮座し、その「琵琶山」は、天ノ川（＝十津川＝熊野川）と坪ノ内川に囲まれた「坪ノ内」の中心部にある。熊野本宮大社の元宮は「大斎原（おおゆのはら）」にあり、そこは熊野川と音無川に囲まれた中州であった（明治38年に洪水により現社地に移築）。熊野川河口に鎮座する新宮速玉大社も、川中島の御蔵島を聖地とする。



神社の構造（原田憲一氏作成）

また、防災拠点として見たときに、神社の構造や機能は注目に値する。なかには、地震や津波、洪水などの災害を指し示すランドマークとなっているものも多く、神社の名称から安全な聖地と危険な聖地の識別が図られている。また、参道・境内・社叢からなる神社の構造は、被災軽減をもたらすものとなっている（上図：原田憲一氏作成）。ほかにも、神事を通じての共同体意識の醸成（祭りと直会）、災害教訓の伝承と減災の工夫（津波てんでんこ）、被災後の相互扶助など、神事を通じての鎮魂と慰撫が図られている。

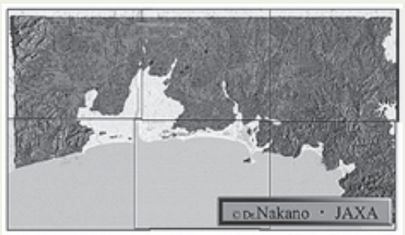
■癒し空間としての「寒川神社」

「癒し空間の総合的研究プロジェクト」の要の位置付けにある相模国一之宮・寒川神社は、相模川下流域に位置し、方位除・八方徐で全国唯一といわれ、年間参拝者数200万人を超える関東を代表する神社である。寒川神社の近くには、縄文時代中期の日本最大規模の1500軒ほどの住居跡を持つ岡田遺跡がある。また、縄文時代有数の遺跡である勝坂遺跡も近くにある。

本プロジェクトでは、相模の国の一の宮、二の宮、三の宮など、古社や延喜式内社の地質・地形・生態系・祭祀伝承などを広く見通し、関東の大規模な聖地である寒川文化圏が、いかなる背景のもとで聖地として成立したのかを、歴史、民俗のみならず、地質学、生態学などから多角的に分析し解き明かすことを試みた。

衛星データに基づいて、延喜式内社の立地条件を時代毎の海水準に照らし合わせたところ、寒川神社が建てられている位置が、西暦500年代では湾に面していたこと、5000年前においては海の中であったことが推測された。なお、現在では内陸に位置している。

それらの成果は『日本の聖地文化――寒川神社と相模国の古社』（鎌田東二編著、創元社、2012年３月刊）として発表された。



西暦500年代の相模湾沿岸部の推定（中野不二男氏作成）

研究プロジェクト

発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■発達障害とプレイセラピー

発達障害に対しては、具体的なスキルの獲得を目標とした療育やガイダンス、さらには適応的な行動パターン確立を目指した行動療法的アプローチが中心となりつつあり、プレイセラピーも含めた心理療法はあまり有効ではないとの見方もある。しかし、心理臨床の現場からは心理療法の成果が多く報告され、広く発達障害的な問題を抱えるクライエントに対してプレイセラピーが奏功することが示されてきた。本プロジェクトはそれを受け、成功事例の検討を重ねるなかで、どのような心理療法が有効であるのか、そのエッセンスをつかむことを目指してきた。そして、象徴解釈とは異なる視点から心理療法のプロセスを捉え、「主体の発生」に立ち会うという視点の有効性を呈示してきた（河合, 2010）。このような観点は、これまで臨床事例研究という方法で専門家に発信される場合が多かったが、社会的関心が高まった現在、発達障害への心理療法の有効性を広く社会に発信していくことが必要であろう。

そこで、本プロジェクトでは、医学研究科・十一元三教授らと連携し、発達障害の子どもへのプレイセラピーの効果を実証的に明らかにする調査研究を行っている。実践に基づきながら、これまで不足していた定量的知見を提示することで、より広範囲に心理療法の意義を発信し、発達障害への援助体制の確立に貢献したいと考えている。

■臨床実践に基づく実証研究

本研究はセンター内プレイルームでのプレイセラピー実践がもとになっている。６カ月間のプレイセラピーにおいて、(1)プレイセラピーの前後で子どもにどのような変化が生じるのか、(2)発達障害の子どもと、発達障害ではない子どもとではプレイセラピーのポイントはどのように異なるのか、について発達検査とセラピーのプロセスから検討する。本研究は、訓練を受けた専門家・大学院生によりプレイセラピーが行われるため、研究自体が支援の一環であり、同時にそれが実証的研究デザインによって強化されていくところに大きな特色がある。平成24年度までに、15名の子どもを受け入れている。

■発達指数とプレイセラピーのプロセスの検討

６カ月間のプレイセラピーを経て、子どもの発達にどのような変化が見られるのか、新版Ｋ式発達検査を用いて検討した。平成23年度までに６カ月間のプレイセラピーが終了した子ども９名のうち、発達障害と認められたのは６名であった。プレイセラピー前後の発達指数に1SD以上の差があるものを変化しているとみなし、個人内で検査結果の比較を行った。

①変化あり群

プレイセラピー前後のＫ式発達検査の結果において、1SD以上の差がみられたのは4名であった。また、２事例では、数値の上昇に伴って領域間の数値のばらつきが少なくなっていた。検査態度についても、開始前の検査では出来ない課題に積極的に取り組みにくかったのに対して、６カ月後の検査では自発的に答えようとしたり、出来ないながらも試行錯誤するなどの変化がみられた。また、独り遊びを行っていた子どもが検査者の模倣を行うなど、他者との関わりという側面でも変化がみられた。

②変化なし群

発達指数やプロフィールの形に変化がみられなかった２例では、母子分離など、変化あり群よりも基礎的な課題に取り組むプロセスに時間を要したと考えられた。検査態度については、変化あり群と同様の変化がみられた。

③プレイセラピーのプロセスの検討

続いてセラピーの内容を検討した。プレイ開始前の子どもには、境界や焦点のなさ、対象や他者の曖昧さ、分離や不在の受け入れられなさなど、共通した特徴がみられた。

プレイセラピーが始まると、面接の枠組み、セラピストの存在とそこでの関係、２人で取り組む具体的な作品などが、定点や参照点として機能し、子どもはそれらを枠にしながら内的な軸を形成していくことが示された。また、分離・分化のテーマがしばしば展開されたが、これは子どもの混沌とした世界に自—他・内—外の境界を生じさせ、内面の成立をもたらすことと関係しているようだった。これらは、発達検査における、自他を区別しつつ他を取り入れる［模倣］、自らを軸に対象を把握し、その差異を判断する［語の差異］［比較］、見通しを立てる［財布探し］などの抽象課題や、［姓名］［性の区別］などの自己像に関する課題の通過という能力的発達へもつながっていた。このことは、子どもの心理的な構造の変化と能力的な発達がそれぞれ別の側面で起こるのではなく、相互に関連した動きであることを示唆していると思われる。

■今後の展開

本プロジェクトではセンターウェブサイトを通じて研究協力者を募集している（「センターからの募集」よりメールにて申し込み）。発達障害へのプレイセラピーの効果を多面的に測定し、それを裏付けをもって示すことで、どのようなタイプの発達障害にどのようなプレイセラピーが有効であるかを明らかにしたい。

研究プロジェクト

発達障害の学習支援・コミュニケーション支援

小川詩乃（こころの未来研究センター共同研究員）＋ 吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

■研究の背景と本プロジェクトの特色

近年、発達障害の診断を受ける子どもは増加傾向にあるが、診断を受けた後の支援体制が整っていない。早急に支援体制を確立し、１人でも多くの子どもを早期から支援することが求められている。一方、発達障害を対象とした研究は近年増えてきているが、まだ発達障害の支援に資する基礎研究は少ない。これは、多くの研究者が、実験場面という限られた一面でしか発達障害児・者をみていないためである。

本研究プロジェクトは、発達障害の子どもを対象にした継続的な学習支援の実施を通して子ども・保護者との信頼関係を築き、その関係をベースに実験的な基礎研究を行っている。これにより、発達障害の支援に役立つ基礎研究の実施が可能である点に特色がある。

■これまでの経緯

2007年11月から発達障害の子どもを対象として継続的な学習支援・コミュニケーション支援に取り組んできた。プロジェクト開始当初は、７名の子どもを対象に週１回のペースで、読み書きを中心とした学習指導をすることにより、支援のノウハウを蓄積した。その過程を通じて、初歩的な「かな」の学習教材がないことから発達障害の特性に合わせた教材を開発した。その結果、個々の発達障害の子どもの特徴に合わせた支援が可能となり、支援を通したラポール（信頼関係）形成により、認知的特徴を検討する基礎研究に取り組むことができた。一例をあげると、共同研究員の磯村朋子は、自閉症児を対象に怒り顔に対する選択的注意について研究を行い、自閉症児が発達とともに怒り顔に対する感受性を獲得している可能性を明らかにした。現在ではプロジェクト内でさまざまな認知実験を行っており、今後はそれらの結果を個人毎に分析して、さらなる支援につなげていきたい。

■支援頻度の調整と保護者へのアンケート

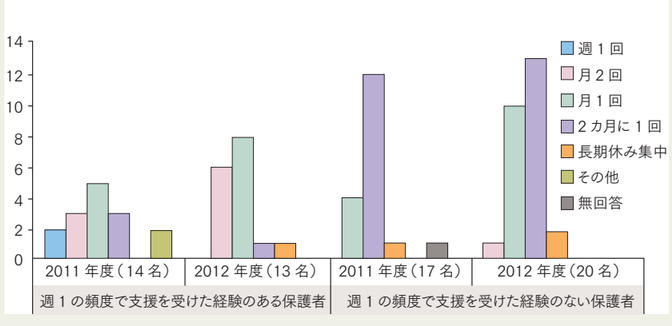
基礎研究の実施に伴い研究協力者の人数を増やすとともに、１名あたりの支援頻度を少しずつ減らしてきた（**表１**）。それに伴い、子どもへの支援では「苦手なことができるようになる場、保護者以外にほめてもらえる場」だけではなく「悩みを共有し対策を一緒に考える／方法を提案することにより、子ども自身が工夫できるようになる」ことを目指した指導を意識するようになった。また、保護者とは「困っていることを共有し、対策を一緒に考える」ことを意識してきた。こうした支援体制に関する保護者の意見を把握するため、支援の頻度に関する希望を問うアンケートを行った（**図１**）。2011年度は、週１回の頻度で支援を受けたことのある保護者はより多くの支援を求めるのに対し、支援開始から回数が少ない保護者は現状の回数（２カ月に１回）におおむね満足しているようであった。また2012年度は、前年度に比べて月１回の希望者が増えた。その理由として「月に１度くらいは通わないと忘れてしまう、ペースがつかみにくい」などの意見があったが、対応の内容としては「定期的に子どもの様子をみてもらうことで、現時点での子どもの状態が分かり、次の教室までの支援のアドバイスが得られる（月１回希望）」、「この頻度で話し合いながら、改善点を考え、家庭や他の教育機関に反映させるので良いと思う（２カ月に１回希望）」など、保護者の意識としても、少しずつ“支援を受ける場”から“子どもへの対応を一緒に考える場”に変化しているように感じている。

今後も多様な視点を取り入れて、継続的な支援を実施するとともに、発達障害の支援に役立つ基礎研究を展開していきたい。

表１　各年度における参加者数と支援頻度

年度	2007-2008	2009	2010	2011	2012
支援頻度*	週１回	週１回	月１回 または月２回	平均して ２カ月に１回	平均して ２カ月に１回
研究協力者人数	7	23	30	34	37

＊遠方に住む等の事情がある場合には調整をした



＊重複回答あり

図１　支援の頻度に関する希望を問うアンケート調査の結果

研究プロジェクト

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

■こころの科学集中レクチャー

2012年度のこころの科学集中レクチャーは、「こころの謎：社会生態学的アプローチと脳神経科学からの挑戦」のテーマで2013年3月 1 日から3日までの3日間実施された。今回で4年目となる集中レクチャーの講師は、山岸俊男先生（玉川大学：社会心理学）、大石繁宏先生（バージニア大学：社会心理学）と、コーディネータの北山忍先生（ミシガン大学：文化心理学）である。山岸先生と大石先生は、人間の社会行動と環境の相互作用について「社会的ニッチ構築」（山岸先生）、「社会生態学」（大石先生）というマクロな観点から講義し、北山先生は文化が提供する外的条件が脳の機能面とをつなぐ、文化脳神経科学という新しい研究分野の概要とその可能性について講義した。それぞれの講師の講義概要（抜粋）は下記のとおりである。

■講義概要

講義 1 （北山忍先生）

「文化神経科学とは何か」

文化神経科学の概要と理論的枠組みを説明し、自己知覚、動機付け、感情制御に関する近年の比較文化的研究を紹介する。同様の分析を用い、怒りとその発現の機序の文化的相違を検討し、とくに近年日本で問題化している「いじめ」や「体罰」の問題を考察する。

講義 2 （北山忍先生）

「認知的不協和の脳神経科学」

講義 1 をふまえ、認知的不協和の文化神経科学の可能性を探る。まずこれまでの行動実験の成果を概観し、文化的要因の効果を検討する。次いで認知的不協和を構成する脳メカニズムを検討し、遺伝的要因と文化的要因が脳を媒介してどのように判断、好み、態度などの行動に影響を及ぼすかについて議論する。

講義 3 （大石繁宏先生）

「社会生態学的心理学とは何か？」

社会生態学的心理学は、これまでのラボ中心の実験心理学ではなかなか捉えにくかった社会というマクロで遠隔かつ複雑な変数がいかに人のこころに影響を与えるのか、また人のどのような心性がさまざまな社会システムを築く布石となるのかを明らかにする。文化心理学や進化心理学との相違点も念頭に置きながら、社会生態学的心理学から解き明かされるこころの謎を検証する。

講義 4 （大石繁宏先生）

「幸せ：社会生態学的考察」

幸せは、紀元前4～5世紀のギリシャ哲学最盛期以来、人類にとって永遠のテーマである。近代経済学の立役者であるベンサムやミルも、国民の幸せを最大化することが国家の目標であるべきであり、そのために政策や法律も設定するべきであると説いた。心理学でも1980年代より幸せについての実証研究が本格的に始められるようになった。本講義では、幸せにとって重要な社会環境についての研究を紹介する。

講義 5 （山岸俊男先生）

「偏狭な利他主義：社会的ニッチ構築アプローチ」

人間は、社会的適応環境への適応行動を通して、その環境自体を集合的に生み出し、維持している。このプロセスを社会的ニッチ構築と呼ぶ。講義では、この社会的ニッチ構築の観点から、偏狭な利他主義（parochial altruism）の分析を行う。人間の協力行動や利他行動を説明する理論構築は、大きく集団淘汰説と間接互恵説とに分けられる。どちらがより妥当な説であるかは、人間の作る社会の性質と人間の社会性を理解するうえで極めて重要な意味をもつ。講義ではこれらの説から予測される行動傾向を検証する実験研究について紹介する。

講義 6 （山岸俊男先生）

「社会秩序と文化：社会的ニッチ構築アプローチ」

間接互恵説から導かれる社会秩序のあり方を集団主義的秩序、また司法制度の確立により生み出される社会秩序のあり方を個人主義的秩序として理解し、それぞれの下での適応行動の性質と、適応行動を促進する心理機序の性質として心の文化差を分析する。

■こころの科学集中レクチャーの特長

こころの科学集中レクチャーは、学部や大学院で開講されている通常の集中講義とはまったく異なる構成で行っている。3日間3名の講師が1日交替でそれぞれの研究テーマについて講義し、その内容について、講義ごとに3名の講師の間でディスカッションするという形式である。学会の講演などとは違い、講義では研究の背景や実験の苦労話、研究に取り組む姿勢まで含めた「ここでしか聞けない話」が展開する。講師の間のディスカッションが時に白熱する議論になるのも、通常の集中講義にはない特長である。

「どの講義もすごく刺激的で、聞いていて興奮してくるのを感じました」「去年参加したときよりも話についていけるようになった。もっと勉強したいというモチベーションにつながる経験になった」「研究内容にとどまらず、それぞれの研究者のスピリットのようなものも端々にみることができた」「他の受講生と交流する時間を設けていただけた点も情報交換になり良かった」。受講生のアンケートから、レクチャーの熱気が伝わってくる。毎年、オーガナイザーを務めてくださる北山忍先生に心からお礼を申し上げたい。

研究プロジェクト

東日本大震災関連プロジェクト――こころの再生に向けて

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■こころの再生に向けて

平成23年3月11日、東日本大震災という、未曾有の事態が発生した。地震・津波・原子力発電所の事故という3つの要素による複合的かつ甚大な影響をもたらす災害を経験したことで、日本における幸福感のあり方、社会関係のあり方は、被災地はもちろんのこと、その他の地域においても変化したと考えられる。本研究プロジェクトでは、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、宗教学・民俗学的アプローチにより、東北大学の鈴木岩弓氏が事務局の「心の相談室」、島薗進氏が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲場圭信氏が共同代表の「宗教者災害救援ネットワーク」などとの連携を保ちながら、1．伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、2．伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生、3．脱原発社会の社会デザイン・世直しのありようを模索していく。

■フィールド調査

2012年度は、3回のフィールド調査を行った。訪問時期・地域は表のとおりである。

なお、3月11日の14時46分頃から、身を投じたフィールド調査および追悼として、雄勝町の荒浜の海に入って「禊」を行った。3月の東北の海は非常に冷たく、津波によって海に飲まれることのどうしようもなさを身で感じることとなった。その際の記述は以下のとおりである。

「この日、追悼の思いを、自分の体の痛みを通して、少しでも感受・感得することなしに、ぬくぬくとしたところで、コートを羽織って、祈ることはできないと思っていた。何もできない、どうすることもできない自分であるが、亡くなった方々に思いを向けるために、少しでもその日の状態の冷たさや痛さを感受しながら、その時を迎えたいという思いが消えなかった。凍りつきそうになりながら、4～5分、海に入ったが、限界だった。ガチガチに震え、浜に上がってからも震えは止まらず、服を着ようとしても、うまく指が動かなかった。こんな指先で、何かにつかまることもできなかっただろう。無念の中で、亡くなっていった方々、押し流されていった方々の気持ちや思いをどう受け止めればいいのだろう」（鎌田東二記）

■フォーラム

研究会の成果報告として、2度の研究会「宗教者災害支援連絡会第 9 回情報連絡会」（代表：島園進）、「被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究」（於：京都造形芸術大学、12月23日）、および2度のシンポジウム「こころの再生に向けて」（於：京都大学こころの未来研究センター、7月11日）、「東日本大震災と宗教者・宗教学者」（於：東北大学、2013年3月2日）を行った。

7月11日のシンポジウムでは、4名から基調報告を受け、議論を行った。黒崎浩行氏（國學院大學准教授）による報告「被災地の神社と復興の過程」では、神社の被災状況のデータ紹介をはじめ、被災地住民の支えとしての神社の働きなどが話題となった。一条真也氏（株式会社サンレー社長・北陸大学客員教授）による報告「東日本大震災とグリーフケアについて」では、大震災後における葬祭事業者の経験の紹介を中心として、遺族の心のケア、サポートの実践例などが紹介された。玄侑宗久氏（福島県三春町福聚寺住職・作家）による報告「福島の現在と宗教の役割と課題」では、福島の現状について、復興の遅れに関するエピソードが紹介されるとともに、宗教者の立場から心のケアの重要性が強調された。島薗進氏（東京大学教授）による報告「宗教者災害支援連絡会の活動15ケ月を振り返って」では、宗教者災害支援連絡会の活動を中間的に振り返った上で、高野山足湯隊の活動を取り上げ、「傾聴すること」の大切さが強調された。

それらを踏まえながら、東日本大震災後の1年間の出来事や活動を振り返りつつ、確認・整理・未来展望を行った。

2012年度フィールド調査

第 1 回調査

5/1	青森・八戸市～岩手・久慈市
5/2	～岩手・釜石市
5/3	～宮城・気仙沼市
5/4	～宮城・石巻市雄勝町
5/5	～宮城・仙台市
5/6	～福島・南相馬市

第 2 回調査

8/24	宮城・名取市閖上～宮城県石巻市雄勝町
8/25	～宮城県気仙沼市
8/26	～岩手県釜石市
8/27	～岩手県遠野市

第 3 回調査

3/10	仙台市若林区荒浜～七ヶ浜～塩竈神社～気仙沼市陸前階上地福寺
3/11	宮城・石巻市雄勝町～女川町～石巻市北上町
3/12	宮城・気仙沼市大島～岩手・陸前高田市～大船渡市
3/13 -14	岩手・宮古市～釜石市～大槌町～山田町～野田村～久慈市～青森・八戸市

研究プロジェクト

察するコミュニケーションと表すコミュニケーション

宮本百合（ウィスコンシン大学マディソン校准教授）

■本研究の目的

コミュニケーションを行う際、人は言葉だけでなく、表情・身振り・状況などの手がかりも用いてお互いの感情や意図を伝えあい、理解しあっている。このようなコミュニケーションは、非言語的コミュニケーションと呼ばれている。心の未来研究センター内田由紀子准教授とウィスコンシン大学大学院生アマンダ・エゲンと私は、非言語的コミュニケーションの目的の文化差に注目して研究を行っている。自己を表現することが重視されている欧米では、自らの意図や感情を他者に対して明確に「表す」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。一方、相手や周りに自分を合わせることが重視される日本では、他者の意図や気持ちを「察する」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。

これまでの我々の研究において、非言語的コミュニケーションの目的を反映して、非言語的コミュニケーションにおいて用いられる手がかりが文化間で異なることがわかってきた。平成24年度の調査ではさらに、文化間で異なる非言語的コミュニケーションに参加することで、異なる心的傾向が促進されるか検証した。欧米の非言語的コミュニケーションに参加すると、自らの意図や気持ちを積極的に表す心的傾向が促進されるのに対して、東洋の非言語的コミュニケーションに参加すると、相手の必要性を察する心的傾向が促進されると仮説を立て、それを検証するために日米で調査を行った。

■平成24年度の調査内容

ウィスコンシン大学のアメリカ人学生と、京都大学の日本人学生を対象とした比較調査を行った。以前の調査において日米の大学生に記述してもらった日常的な非言語的コミュニケーション場面の中から無作為に抽出した各文化80個の場面をそれぞれの言語に翻訳し、参加者に提示した。参加者は各場面を読んで、①自分が送り手であったら、自らの気持ちや意図をどのくらい積極的に表したと思うかと、②自分が受け手であったら、送り手の必要性をどのくらい察したと思うかを、1（全然）から7（非常に）の尺度を用いて評定した。

図1に示されているように、アメリカ産の場面は日本産の場面よりも、自らの意図や気持ちを積極的に表す心的傾向を促進していたが、そのような促進傾向の違いはアメリカ人参加者においてのみ見られていた。また、図2に示されているように、日本産の場面はアメリカ産の場面よりも、相手の必要性を察する心的傾向を促進していたが、そのような促進傾向の違いは日本人参加者においてのみ見られており、アメリカ人参加者においては、むしろ逆の傾向が見られていた。

■まとめ

上記の結果から、アメリカの非言語的コミュニケーションに参加すると、自らの意図や気持ちを積極的に「表す」心的傾向が促進されるのに対して、日本の非言語的コミュニケーションに参加すると、相手の必要性を「察する」心的傾向が促進されると言える。ただ、そのような心的促進傾向は、それぞれの文化の中で暮らしている人においてのみ見られていた。ここから、各文化の非言語的コミュニケーション場面において必要とされる心的傾向が誘発されるには、当該の文化にある程度慣れ親しんでいる必要があることも示唆される。日本人がいきなりアメリカの非言語的コミュニケーション場面を経験しても、自らの意図を表すようにはならず、またアメリカ人が日本の非言語的コミュニケーション場面を経験しても、相手の必要性を察するようにはならないということであり、異文化間コミュニケーションにおける、非言語的な側面の習得の難しさを示唆しているとも考えられる。

今後はさらに、異なる非言語的コミュニケーションが関係性に与える影響についても検証していく予定である。

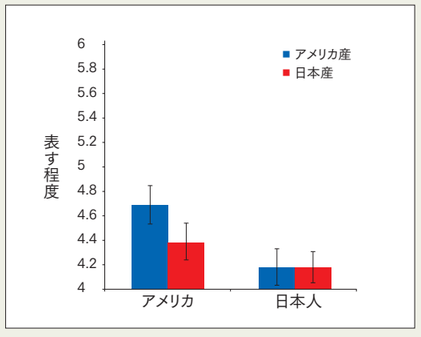


図1　アメリカの非言語的コミュニケーションは自らの意図を「表す」傾向を促進するか？

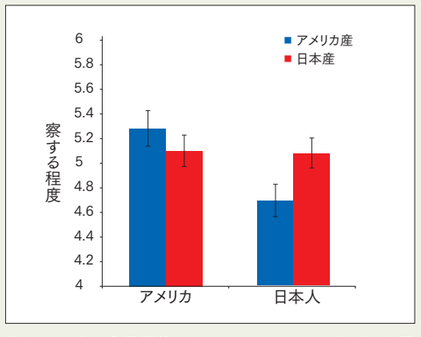


図2　日本の非言語的コミュニケーションは相手の必要性を「察する」傾向を促進するか？

研究プロジェクト

他者を察するこころ、他者から学ぶこころの形成過程：表情認知課題を用いた文化心理学的研究

増田貴彦（アルバータ大学心理学部准教授）

近年、文化心理学では、他者の表情を判断する際に、日本人は欧米人にくらべ対象となる他者をとりまく周辺人物の表情にまで目を向け判断に取り入れる傾向が報告されている（Masuda, et al., 2008; 2012）。しかしながら、こうした文化特有の認知パターンが発達のどの段階で形成されるのか、また文化特有の認知のパターンの形成に保護者はどのように関わっているのかについては、わずかな研究例を例外として（Imada, et al., 2012）、いまだ十分なデータはない。本プロジェクトでは、以上のような問題に答えるべく、小学生を対象とした研究を行った。

■方法

日本およびカナダ（ヨーロッパ系カナダ人）の7歳から10歳までの児童を対象とした。参加児童は、増田ら（2008）の用いた5人の人物のアニメーション画像を見た後（図1）、画面の中心人物の喜びの度合い、および悲しみの度合いを評定し、なぜそのような評定をしたのか、その理由を述べた。

■結果

実験課題画像は、背景の人物の表情と中心人物の表情が一致した画像（例：うれしい顔の中心人物が4人のうれしい顔をした背景人物に囲まれた画像）と、中心人物と背景人物の表情にずれが生じた不一致画像（例：うれしい顔の中心人物が4人の悲しい顔をした背景人物に囲まれた画像）が用意された。これら表情一致画像と表情不一致画像の差分を従属変数とした、文化×年齢の分散分析の結果、7－8歳児では、カナダおよび日本とも、中心人物の感情判断の際に、背景の人物の表情の影響はほとんど見られないのに対し、9－10歳児では、日本の児童のほうがカナダの児童に比べ、背景情報を考慮にいれた判断をしていることがわかった。また、評定の理由について、特に背景情報について言及した発話の数を従属変数とした文化×年齢の分散分析を行ったところ、先の評定値の結果と一貫して、7－8歳児では、カナダおよび日本とも背景への言及量は少なく、そこに文化差は見いだされないのに対し、9－10歳児では、日本の児童のほうがカナダの児童よりも背景情報についてより多く言及する傾向が見出された（図2）。

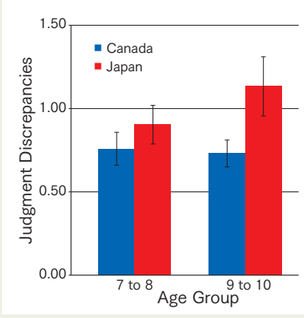
■考察

今回の実験結果は、文化特有の認知パターンは、9歳以降に形成されるという可能性を示唆している。では、こうした認知パターンの違いはどこから生まれるのだろうか？　日本およびカナダにおいて7－8歳の親子を対象として現在行っている継続研究では、それぞれの文化の保護者が子どもに対して文化特有の認知パターンと対応した語りかけをしていることが示されている。このことから、ブルーナーらの論じる「足場かけ」――子どもが文化的学習をする場を親が提供するというコミュニケーションスタイル――が認知の文化差を生み出す源泉の1つと考えることも可能であろう（Wood, Bruner, & Ross, 1976）。

■まとめ

このプロジェクトでは、他者とのきずなを構築するうえで、人間にとって重要な「他者の気持ちを察する能力」、また文化的に形作られた意味体系を、「保護者が子どもたちへ伝える能力」、「子どもたちが保護者から学ぶ能力」に焦点を当てていた。今後の研究では、親の発話の影響をうけた子どもが、親との共同作業を経験したのち、親のいない場面でも文化特有の認知パターンを示すかどうかを検討する必要があるだろう。また将来的には、臨床レベルでの個人差研究（例：ニート・ひきこもり傾向の高い人々、自閉症傾向のある人々との比較など）へ研究を発展させていく可能性も考えられるだろう。

図1　一致画像および不一致画像



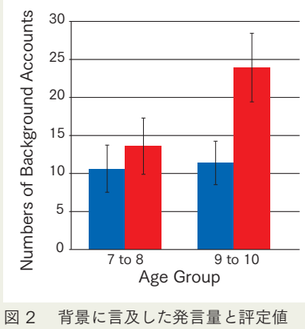


図2　背景に言及した発言量と評定値